妹はグラビア♡アイドル!3

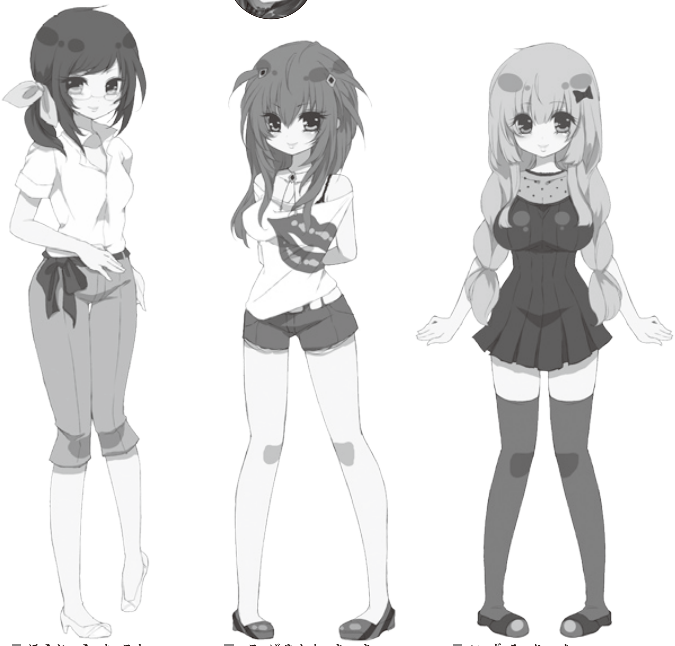
小説 あらおし悠
挿絵 くく維きゃん

立ち読み版

序章　小悪魔と妹と　006
第一章　小悪魔アイドルの臨時マネージャー　017
第二章　海水浴場で水着バトル！　058
第三章　コスプレデートで大ピンチ　100
第四章　お仕置きはナースのお尻で　146
第五章　記者会見は大騒ぎ　193
終章　お休みはみんなで一緒に　245

登場人物紹介

Characters



ほうじょう まこと
北条真琴
梨奈のマネージャー。彼女自身も以前はアイドル歌手として活躍していた。

こ ばやかわ さ き
小早川咲希
梨奈のライバル的存在ながら、今回も変わらず同居中。弘樹の恋人であることを公言しつつも、梨奈との関係も大事にしている。

いずみ り な
和泉梨奈
香澄梨奈（かすみりな）として活躍するGカップグラビアアイドル。弘樹の義理の妹にあたる。清純派巨乳を売りに、人気もすっかり定着。

たちばな
橘エリカ
咲希が所属する事務所の先輩グラビアアイドル。

いずみひろき
和泉弘樹
梨奈の兄。学生であり、時に梨奈の付き人として活躍を支えている。

「おにいちゃん……今日の咲希ちゃん、変じゃない？」

遅くに戻った梨奈は、戸惑っていた。咲希が、彼女から離れようとしない。二人で一緒の入浴はよくあるが、今日の彼女は夕食の時もべったり。

「はい、あーん」

「さ、咲希ちゃん⁉　ひとりで食べられるから！」

箸を奪い取り、赤面する梨奈に「あーん」を強要し続けた。その後も並んでソファに座り、テレビ鑑賞する彼女の首に腕を絡めて抱きついている。いくら梨奈がおっとりのんびりでも、親友の異変に気づかないほど鈍感ではない。

「おにいちゃん、咲希ちゃんに何かした？」

「いやその……。まあ、今日は咲希ちゃんの好きにさせてやってくれ」

きっと、先輩の説教が想像以上に堪えたのだ。弘樹にも迷惑を掛けたと思っているに違いない。だから、こっちではなく梨奈に甘えているのだ。

ぽんと頭に手を置くだけで何も説明しようとしない兄に、怪訝（けげん）な顔を向ける。そんな梨奈に、咲希はすりすりと頬擦りした。短パンから伸びた脚が梨奈の太腿に絡みつき、キャミソールの肩紐が両方落ちて、梨奈に負けない乳房の頂点近くまで零れ落ちる。

「ヒロは何にもしてないよ。むしろ、仕事でドジっちゃったわたしを、一生懸命庇ってくれたんだから。梨奈はいいなぁ。こんな優しいお兄さんがいて」

「そ、そうかな……って、咲希ちゃん、重い……きゃあっ⁉」
ぐぐっと、咲希が伸し掛かる。かと思った瞬間に、二人の身体が一気に傾いた。スプリングが軋みを上げて、少女たちがソファの上で重なり合う。勢い余って高々と上がった梨奈の右脚が、背もたれを跨ぐように引っ掛かる。
「おいおい、大丈夫か……って！」
慌てて駆け寄った弘樹は、妹のあられもない姿に思わず目を逸らした。部屋着のワンピースが捲り上がって、清純派にあるまじき大開脚。白くて滑らかなお腹から、薄桃色の下着まで丸見えだ。
「咲希ちゃん、おーもーいーっ。は、早く離れて…………ふきゃっ⁉」
「あはぁ……。梨奈のおっぱい、ふわふわぁ。柔らかーい」
兄に助けを求める声を無視し、咲希は逆に体重をかけた。横たわりながらも豊かに盛り上がる梨奈の胸。その谷間に無邪気な笑みを埋め、両手でふたつの小山を揉みしだく。
「ひぁっ！　やンッ！　そんな、揉んじゃ……ンッ、きゅうぅあぁぁぁ！」
「んふ、梨奈のおっぱい気持ちいい。おや？　この感触、さてはブラをしてないな？」
「えっ？　ダメダメ、きゃあぁぁっ！」
咲希は、組み敷いた少女のワンピースの肩をはだけた。揺れながら零れる剥き出しの乳房。ツンと尖ったピンクの小粒が、肌色の山頂でグミのようにプルプル震える。
「あは！　美味しそう……。食べちゃお♪」

「ふぁ⁉　ふあぁぁぁぁぁ‼」
勃起乳首を唇で挟まれ、梨奈が甘い悲鳴を上げた。ちゅぱちゅぱと音を立てて吸い、舌で根元から掬い上げられると、細い肢体がもどかしげに腰を振る。
いきなり始まった少女たちの戯れを、弘樹はソファの脇にしゃがみ込んで生唾を飲み込みながら見物した。自分の妹が、同性の美少女に責められ、白い肌を桜色に染める倒錯的な光景は、何度見ても胸が高鳴る。股間もウズウズと熱くなる。
「ンッ、きふゅあぅんっ！　お、おにいちゃんっ、見てないで助け……ひぃあぁぁっ！」
首筋を舌で逆撫でされて、梨奈の唇がわなないた。愛撫される姿を兄に見物され耳まで真っ赤。眼に涙をいっぱいに溜めながら、抗いきれない快感に染まっていく。
しかし、溺れているのは梨奈だけではなかった。
「梨奈……りなぁ……」
からかい半分だった咲希の声に、一瞬、切なげな音色が顔を覗かせた。まるで、すがるように親友の豊かな胸に顔を埋める。弘樹は、無意識にその肩を撫でていた。
(人気アイドルって言ったって、まだ二十歳前の女の子だもんな……)
本人の努力の賜物とはいえ、トップを守ること、トップアイドルらしく振る舞うこと、そして事務所の名前を背負うことには、他人には想像できないプレッシャーがあるはず。その緊張の糸が途切れることもあるだろう。
「あふっ……。さ……咲希、ちゃん……？」

咲希の声色の変化に、梨奈も気づいたのだろうか。深く喘ぎながらも抵抗をやめ、親友を胸の中に抱き締める。

「もう……仕方ないんだから……」

そして、咲希に顔を上げるように促すと、睫毛を伏せながら唇を差し出した。

「はぁ……梨奈…………ん、ンむっ！」

艶やかで柔らかい、弘樹もその感触をよく知っている梨奈のぷるぷるリップ。咲希は、甘い果実のようなそれに、吸い寄せられるように唇を重ねていった。

「あむ、ふ……。さ、咲希ちゃん……っ。好きにして……いいよ、あたしを、ンふ……」

美少女同士の吐息が混ざり合い、重なった唇の隙間から、濡れたピンクの肉片がチラッと覗く。妹の口腔に侵入し掻き回す小悪魔の舌。梨奈も、最初の抵抗が嘘のように、うっとりと眼を閉じてキスを貪る。

「んむっふぁ……あぷ。梨奈、んむぅぅ！」

「んふ……咲希ちゃぁん……あは、ちゅっ、ちゅぷ……ちゅるッ！」

いつの間にか攻守は逆転し、上体を起こした梨奈が咲希の口を掻き回していた。仰け反り気味の彼女の背中を支えるように抱き締めて、顔ごと舌を捻じ込んでいく。ぬらぬらと絡み合う二枚の舌の淫靡さに、弘樹は息を詰まらせた。限界まで硬直した肉棒を思わず掴み出し、自分の手で扱き出す。

「う……はっ、うっ……お、あぁぁ……！」

弘樹は弾かれるように立ち上がり、キスに耽る咲希を背後から抱き締めた。キャミソールの裾から手を入れ、Ｆカップのバストを最初から荒っぽく揉みしだく。ブラをしていない肌が掌に吸いつき、すぐに辿り着いた突起を指先で摘んで捏ね回す。
「んあぁっ！　ヒロまでそんな……あむっ、ふむきゅふぅぅぅ！」
梨奈も兄に協力して咲希を抱え、喘ぎは全て口の中に吸い込んだ。踊るようにもがく身体を兄妹で前後から挟み込み、少女の逃げ場を塞いで快感責めで追い立てる。
「ちょ、ちょっと待って、ふきゅあぁっ！　ち、乳首、そんなっ、ひっ⁉」
振り向いた彼女の眼に、戸惑いが浮かんでいた。小悪魔を気取ってみても、根は真面目な女の子。弘樹が参戦したことで、今日の失敗を思い出してしまったのかもしれない。
（こんな時くらい、気持ちいいことだけ考えればいいのに……）
なら、自分が頑張ればいいだけのこと。弘樹は背後から彼女の耳を甘噛みしつつ、前後にうねる下腹部に手を突っ込んだ。
「ふあぁ⁉」
短パンの内側は、蒸れたような熱気に満ちていた。さらに手を伸ばして、下着の底から侵入を計る。ふにゃふにゃに蕩けた恥襞と、熱いとろみが、たちまち指先を包み込む。
「咲希ちゃん、もうぐっしょりだ。いつもより多いんじゃないか？」
「本当？　あたしも見るぅ♪」
「な、何てこと言うのよヒロ！　梨奈、パンツ脱がすなって……きゃぁぁぁ！」

ジタバタ暴れる上半身を仰向けにして押さえ込む。その間に、下半身は梨奈が嬉々として丸裸にしてしまった。
「わぁ、本当だ。お尻までトロトロ流れてるぅ。おにいちゃん、見て見て」
親友の股間を覗き込み、歓喜の声を上げる梨奈。彼女の手招きに、弘樹も覆うもののなくなった少女の脚の間に移動する。
「凄いよ、咲希ちゃん……。中まで見ていいかな？」
「ば、ばかっ……！　そんなこと……はぁ、はふぁ……はぁぁぁぁ……」
彼女の返事を待たず、淫裂を掻き分けた。蠢く襞と、ムッと濃くなる蜜の匂い。その甘さに誘われて、弘樹は肩で彼女の太腿をグッと開いた。卑猥な割れ目に舌を寄せると、彼女の陰唇の方からキスするように吸いついてくる。
「ひッ！　ふぅあぁぁぁあ……はぁぁぁぁ……！」
柑橘系のような匂いの淫液を、弘樹は夢中で啜り上げた。咲希の内腿の筋が強張り、自分を抱き締め身悶える。舌先を尖らせた膣口を突けば、自慢のお尻が浮いて跳ねる。
「ヒッ、いぃいぃあぁぁぁ！　そ、そこ、突いちゃ、ダメぇぇぇっ！」
「あたしも、舐めるぅ……」
横で指を咥えていた梨奈も、クンニに割り込んできた。二人は譲り合い、あるいは顔を寄せ合って恋人の性器に吸いつき、味わう。
――ちゅるっ、じゅるじゅる……ちゅばっ！

――れろん、ちゅぷちゅぷ……ちゅぱちゅぱ、ちゅるる！

「ひぁ⁉　ひぃぃぃ！　な、何してるのよ、バカ兄妹ぃ……！」

罵（のの）りながらも、咲希の声は蕩けていた。兄妹の前で大きく脚を開き、胸を自分で揉みしだく。快感を堪えきれないかのように、浮かしたお尻を左右に振り立てる。

「ンふ……っく、はぐっ！　むきゅぅぅぅ……ン、きゅふぅぅふぁあぁぁ……！」

その姿に弘樹も梨奈も昂り、舌愛撫にのめり込んだ。蜜の甘さと、時折触れる妹の舌の柔らかさに、弘樹の身体もぴりぴり痺れる。舌先で生まれた甘電流が、背筋を通って剥き出しの股間をギチギチにいきり立たせる。

「きゅあっは！　ひッ、ひッ……ひあっ！」

咲希の悲鳴が短くなってきた。腰や膝がガクガク震え、何かを掴むように右手が空中でもがいている。絶頂の近さを予感し、膣口中心の愛撫に移ろうとした弘樹の下半身が、不意に心地いい感触に包まれた。

「おあ⁉」

「おにいちゃんのも、硬い……。ビクビクしてる……」

梨奈の手が、勃起をやんわり握っていたのだ。潤んだ瞳で、極太に膨らんだ兄の性器をうっとり見詰める。まるで好物を見つけたように、小さな舌が唇を湿らせる。弘樹は深い吐息と一緒に、硬直の先端部から先走り液を漏らし、妹の手を濡らした。

「咲希ちゃん、おにいちゃんの、すごく大きいよ。……欲しい？」

硬直肉棒をゆっくりと扱きながら、梨奈は喘ぎを漏らす親友の唇を舌でなぞった。
「ほ、欲しい……。ヒロのおちんちん、欲しいっ、挿れて！」
「もう。咲希ちゃんたら。そんなにあっさり言ったらつまんない。でも……ふふっ、エッチな咲希ちゃん、好きぃ……」
「ど、どっちがエッチよ。この……小悪魔っ、ふあぁぁぁ……」
心の中で弘樹も同じ突っ込みをする。しかし、梨奈の手に導かれ、亀頭が濡れ淫裂に触れると、もう、温かいぬかるみの中に突っ込むことしか考えられない。
「咲希ちゃん、挿れるよ……うぐっ、くっ、くぁ……！」
「も、もう挿れてるじゃない！　ふふぁぁ……太い、大き……はふぁっ、ふぅあぁっ！」
ずぶずぶと、温かい恥穴に吸い込まれていく勃起ペニス。しなやかな濡れ膣肉が、握り締めるように肉幹を包み込む。快感に歯を食い縛りながら根元まで押し込むと、咲希の腰がビクンと跳ねた。その拍子に、肉壁のざらつきに大きく張ったカリ首が擦られる。
「ふぉあっ！　おあぁぁぁ！」
痺れるような快感が脳天を直撃し、弘樹の身体が勝手に動いた。彼女の太腿を持ち上げM字開脚を強要し、広がりきった膣穴をガチガチの肉槍で掻き回す。肉幹に愛液を纏わせながら腰をぶつける。
「やだ……こんな格好ぉ……恥ずかし……は、ひぃぃふぁあぁぁぁン！　そこダメ、擦っちゃらぁめぇぇぇぇっ！」

言葉とは裏腹に、咲希は脚が閉じないように自分で膝裏を支えた。恥ずかしい大股開きに全身の肌を染めながら、浮かせた腰の中に弘樹のペニスを迎え入れる。しかも、脚を全開にしていながら、彼女の蜜壺は信じられない窮屈さで勃起を抱き締めた。まるで少女の指のように巻きつく襞で、敏感な裏筋を舐め上げる。

「あは。咲希ちゃん、すごい格好……。こんなの、写真集でも見たことないよ？」

「ば、ばか梨奈っ……言わないでってば……ふむぅ！」

梨奈にまで羞恥を煽られ、その上、抗議はキスで塞がれた。鎖骨まで迫り上がったキャミソールから完全に乳房が飛び出し、抽送に合わせてリズミカルに揺れる。

「んンンッ！　ぷあぁッ！　はぁぁぁ……はきゅっ、ふっうぅぅはうぅぅあぁぁ！　浮いちゃう……身体、はッはくッ……飛んじゃいそう……ッ‼」

顎を突き上げ、目茶苦茶に髪を振り乱す咲希。このまま絶頂まで追い立てようと抽送のスピードを上げる、その弘樹の目の前で、梨奈が咲希の腰に跨った。

「おにいちゃん……あたしもぉ……！」

いつのまに下着を脱いだのだろうか、スカートをめくって裸のお尻を切なげに振る。小振りながらぷるんと柔らかそうな妹の尻肉が、絶頂間近でガクガクと痙攣する咲希の下腹部に重ねられた。妹の意図を理解し、いったん咲希から勃起を抜き取る。

「やぁぁぁ！　抜いちゃイヤ、もっと……はぁぁひぃぃぃぃ⁉」

不満を言わせる暇など与えない。弘樹は彼女の蜜でベタベタになった肉棒を、縦に並ん

だふたつの女性器の間に突っ込んだ。
「あぁぁ、凄いの……！　お、おにいちゃんの……が、あぁぁぁン！」
「はふっ！　はぅぅン！　ヒ、ヒロのおちんちん擦れ、て……ひぃうぁぁぁ！」
二枚の媚唇が勃起を挟む。ぬらぬらと涎を塗りつけながら肉幹にキスをする。弘樹は梨奈の腰に手を掛けて、ぬめる媚肉の間を夢中で往き来した。何度も抜き差ししていると、カリ首の縁がふたつの硬くしこった淫核をするっと掠めた。
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ⁉」
「クリちゃん、ダメぇぇぇぇぇぇぇッ‼」
たったそれだけの刺激で、二人の少女が激しく仰け反る。咲希の脚が跳ね、梨奈の腰を抱き締めた。必然的に、その間に挟まれたペニスへの密着度と圧迫感も跳ね上がる。
「おうっ、おぁぁッ！」
それだけでも堪らない快感なのに、挿入しているようにカクカク動く二人の腰に扱かれて、危機的な射精感が根元から込み上げてきた。
「ま、待てよ二人とも！　そんなに動いたら……俺……俺、ぐぁ！」
「いいよ、おにいちゃん……っ！　あたし、構わないからッ！」
「わたしも……もうダメ！　早く、ちょうだい！　ヒロのちょうだい！」
彼女たちも限界が近い。弘樹は我慢を諦めて、射精に向けてラストスパートをかける。
「い、いくぞ二人とも……出すぞ、出す、ぞ……出る、出るッ‼」

──どびゅっ、どびゅぶぶ、びゅるるる、ぶりゅうぅぅぅ！
「ふぁぁぁぁあ！　熱い……お腹熱い、ひぃぃあぁぁぁぁぁッ!!」
「わたしも、わたしもイクッ、イクぅぅぅふわぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
どくどくと、重なった少女たちの間に放たれる白濁粘液。弘樹は背中を強張らせながら思いの限り放出し、それが、密着したお腹の間に広がっていくのを感じていた。
「あーあ、お腹ベトベトぉ。うわっ、ソファまで垂れてるじゃない。ヒロ、出しすぎー」
「あたしも、スカート染みになっちゃう。ふふっ」
ひとしきり快感に浸り、気だるそうにソファで重なっていた少女たちが、のろのろと身体を起こした。身体にかけられた精液を指で掬って、クスクスと笑っている。
「でも、これでまた明日から元気に頑張れるね、咲希ちゃん」
「梨奈、あんた……」
咲希も弘樹も、目を見開いた。まるで、咲希が落ち込んでいる理由を知っているかのような梨奈の言葉に。だが、そんなはずはない。多分、同じようにトップを走る者として、ライバルの苦悩を敏感にキャッチしたのだ。
「まったく、あんたって……。そんなこと言われたら、頑張るしかないじゃない」
嬉しそうに苦笑する親友に、梨奈は「ん？」と無邪気に小首を傾げた。

「いいじゃん。ちょっと付き合ってくれるくらいさー」
海風に流されながらも、梨奈と男たちの会話がハッキリと聞こえてきた。交わされる言葉を聞く限りは、確かに普通のナンパだ。だが、みんな筋肉質で身体が大きく、金髪に染めた髪や鋭い目つきが威圧感を与えてくる。ジャラジャラと大量のアクセサリーもさることながら、鼻や舌にまでつけたピアスが、普通の学生ではないことを物語っていた。
梨奈の脚がガクガク震えている。迷惑どころか、完全に怯えている。弘樹は、咲希の見立てが間違っていないことを祈った。
「——やあ、ナンパ？」
不安に顔を顰める弘樹が見守る中、頃合いを見計らった咲希がナンパ男たちに近づく。不敵な笑みで、彼らと、梨奈の間に割り込んでいく。
救い主が現われ、梨奈の顔がパッと明るくなった。咲希はウインクして、甘ロリ少女の肩に手を回す。そんな二人に、男たちの顔が険しくなった。
「なンだぁ、お前は」
「オレ、こいつのカレシ。つまり、こいつはオレのカノジョなんだ。じゃ、悪いな」
抱いた梨奈の肩を押し、足早にその場を去ろうとした。予定では、彼らが彼氏持ちの梨奈を諦めナンパは終了。だが、そうはいかなかった。三人は素早く咲希たちの前後に回り込み、二人を囲んでしまったのだ。
「おいおい待てよ。俺たち、まだ彼女と話してる途中なんだからさぁ！」

急に横から割り込まれ、プライドを傷つけられたとでも思ったのだろうか。咲希の肩を突き飛ばそうとする。それを察知した彼女は、身をかわそうとしたが、一瞬遅く、胸を鷲掴みにされてしまった。

「きゃあ‼」

思わず上げた悲鳴に、男たちが顔を見合わせる。

「おい……こいつ女だぞ！」

男たちの咲希を見る目に欲情の色が浮かぶのを見た瞬間、弘樹は反射的に飛び出していた。植え込みを飛び越えた動きは決して素早くなかったが、まさか、そんなところから別の男が出て来るとは思わなかったのだろう。意表を突かれ、完全に動きが止まっている。

「おりゃあっ！」

咲希たちの正面にいた男に決死の思いでタックル。思いのほか吹き飛んでくれた彼を踏み越え、少女たちの手を取り、怒号を背中に聞きながら全速力で走り出す。しかし、女の子を二人も引っ張っていては、確実に追いつかれる。

「……こっちだ！」

明かりが煌々と照らされたショッピングモール。そこなら今の時間でも大勢の人がいるはず。人ごみに紛れてしまえばこっちのものだ。だが店に飛び込み振り返ると、まだ彼らのものと思われる怒声が、ガラス戸の向こうから響く。

買い物客も、何事かとざわめいている。意外なしつこさに舌打ちし、どこに逃げようか

迷っていると、今度は梨奈が弘樹と咲希の手を引っ張った。
「二人とも、こっち！」
中央の通路を抜け、辿り着いたのは併設された遊園地。そして、彼女が指差したのは、この臨海公園名物の大観覧車だった。幸い、すぐに乗れそうな人数しか並んでいない。考える余裕もなく、三人はチケットを買ってゴンドラに飛び乗った。
「はぁ……はぁっ……はぁ～……」
ゆっくりと上昇する小さな籠の中で、次第に見えてくる夜景を楽しむ余裕もなく、三人はゼイゼイと空気を貪った。逃げきれたのが不思議なくらい、全身が軋みを上げる。しかし弘樹には、酸素不足よりも気になることがあった。
「咲希ちゃん、梨奈……。ごめん、俺がこんなところに連れ出したばっかりに……」
芸能人とばれることくらいは予想していたが、こんな目に遭うなんて。もし、この格好がトラウマにでもなったら、練習が無意味どころか逆効果だ。ドラマのオーディションどころではなくなってしまう。
現に、少女たちはゴンドラの隅で肩を寄せ合い、俯き、震えている。
「……………あは」
「…………あは？」
「あは……あははははははっ！　あー怖かったぁ！」
ショックのあまり、おかしくなったのかと思うほど、二人は腹を抱えて大爆笑。呆気に

取られる弘樹を見て、さらに涙を流して笑い転げる。
「な……なんだよ！　心配したのに！」
「あー、ごめん、ヒロ。でも……だって……あはははははっ！」
笑いが止まらない少女たちにヘソを曲げ、弘樹は顔を逸らす。だが、横目に映った二人の脚が細かく震えていた。やはり、相当に怖かったのだろう。恐怖から解放され、笑っているのか泣いているのか、自分でも分からなくなるほどに。
「う……うぐ……」
しかも、梨奈の引き攣った笑いに嗚咽が混ざり始めた。釣られて咲希の顔からも笑みが消える。まずいと思った弘樹は慌てて立ち上がり、二人の間にグッと身体を押し込んだ。
「え……ヒロ？」「おにいちゃん？」
キョトンとした二人の肩を、思いきり抱き寄せる。このまま泣かせてしまったら、何のためにこんな所に連れ出したのか分からない。
(いや……オーディションとか関係ない。怖い思いをさせたのは俺のせいなんだから、俺が何とかしなくちゃ。何か楽しいこと……嫌なことを忘れられるくらいの……)
しかし何も思いつかず、弘樹には、ただ彼女たちを強く抱き締めることしかできない。
「……ごめんな」
ガックリ項垂れ呟くと、梨奈と咲希は顔を見合わせ、クスクスと笑い始めた。そして、揃って腰を浮かせると、ゴンドラの床に跪き、左右から弘樹の両膝に手を置いた。

「あたしたちこそ、ごめんね、おにいちゃん」
「そうね。助けてくれたお礼をしなくちゃね……」
声が熱っぽい。何の合図もしていないのに、まるで示し合わせたように、微笑みながら二人の手が揃って太腿を遡ってくる。股間を狙って這い寄ってくる。
「お、おい。お前ら何を……」
「咲希ちゃんが言ったでしょ。助けてくれたお礼だよ」
彼女たちの大胆さに呆気に取られる。弘樹が励ますまでもなく立ち直ったのだろうか。だが、見上げる瞳は真剣そのもの。怖くて、不安で、弘樹にすがっているのだ。
（いいや、この娘たちの好きにさせよう。それで、嫌なことが忘れられるなら……）
この大観覧車の所要時間は、せいぜい十五、六分。地面に近づくと外からも見えてしまうので、楽しめる時間はもっと短くなる。手っ取り早く、手か口での奉仕を想像した。
ところが二人は身体を起こし、手際よく服を脱ぎ出した。梨奈はワンピースの肩紐を外し、咲希はタイトなジーンズを脱ぎ捨て、豊満な乳房と小振りなお尻がまろび出る。
「お、おい⁉　さすがにここでそれは……おぉはぁぅ！」
戸惑う弘樹の股間に、咲希がお尻を押しつけるように腰を下ろした。グラビアアイドル小早川咲希の、自慢のお尻。ふにゅっと柔らかい感触に、ジーンズの中で覚醒する牡の肉塊。脇から手を伸ばした梨奈は、その膨張肉を愛おしそうに扱きながら掴み出すと、リレーのバトンのように咲希のお尻に手渡した。

「あはぁ……ヒロの……もう、こんなに熱い……」
欲情に蕩けた声で咲希が囁く。汗ばんだペニスに、嬉しそうに唇をペロリと舐める。快感の微電流で勃起が跳ねる。それが合図だったように、彼女の美尻が勃起を捏ね始めた。
「あぉ……あっ、咲希ちゃ……ンぐっ…………ンむ！」
汗ばんでいたのはペニスだけではない。窮屈なジーンズに押し込められていた少女のお尻の谷間も、また大量の汗を掻いていた。ぬるぬるとした潤滑油が肉茎の表皮を滑り、熱い痺れが背筋を走る。
「おぉぉぉッ！　むぐっ、ぐぅぅぅッ！」
尻肉がフルストロークで裏筋を舐め上げた。少女の汗が媚薬のように勃起に沁み込み、弘樹は悲鳴に近い呻きを必死に噛み殺す。観覧車の中とはいえ、夜景が見える野外であるという意識が異様な緊張と興奮をもたらし、窓ガラスを淫熱で曇らせた。
「おにいちゃぁん……あたしもぉ……」
梨奈が、切なげな瞳で見上げながら両手を広げる。彼女は座席で膝立ちになると、弘樹の顔を、その豊かな胸に抱え込んだ。こっちの谷間もしっとりと汗ばんでいる。むせそうに甘ったるい匂いを、弘樹は荒い呼吸でいっぱいに吸い込んだ。
しかし、甘美な匂いに酔った目に映るのは、ショートボブの見知らぬ少女。そして、お尻でペニスを揉み扱いているのは見知らぬ少年。
（ああ……俺、誰と何をしてるんだ……？）

名前も知らない相手と一夜限りの関係を楽しむように、弘樹の身体も本能に引き摺られた。少年のお尻を肉棒で突き上げ、唇に触れた少女の勃起乳首を夢中で転がす。

「あふっ…………お、おにいちゃ……ふ、はふぁあぁぁぁっ！」

「はぁ……ヒロのおちんちん、また硬くなったぁ……」

お尻に肉の強張りを感じた咲希が、歓喜の表情で振り返る。右に左に振られる美肉で肉柱を弄ばれ、弘樹は歯を食い縛りながら彼女の胸にしがみついた。

「んふぅ……はぁ……。あたしも、おちんちん、欲しい……」

乳首責めで陶然となった梨奈も、弘樹の股間に顔を寄せた。髪を掻き上げ、親友のお尻の谷間から飛び出す亀頭に口づける。先端の丸みを唇で挟み、くるくると舌を這わせる。柔らかな尻肉と、しなやかな舌。異なる感触に責められ、勃起が歓喜の悲鳴を上げる。

「はぅうっ……！　はぁぁぁ……うっ！　き、気持ちいいよ、ふたり、とも……ッ！」

息を詰まらせる弘樹の反応に気をよくし、少女たちの愛撫にも熱が籠った。裏筋を圧迫され、先端からドクンと大量の先走り液が絞り出される。

「ん、む……」

梨奈は、口に出されたそれを飲み込まず、身体を起こして咲希にキスした。唾液と混ぜて、親友の口に流し込む。そして再び鈴口から粘液を吸い上げた。まるで親鳥が雛にエサを与えるように、兄の亀頭と親友の唇の間を何度も往復する。

「んふっ、変な味……ン……」

咲希も、うっとりと眼を閉じ卑猥なキスを受け入れる。自分の出した体液が少女の間でやり取りされる、その卑猥な光景に弘樹の下半身が激しく軋んだ。
「さ……咲希ちゃん、俺……俺ぇっ！」
「きゃ……あぁン⁉」
抑えきれない情動に、弘樹は咲希の肩を掴んで腰を振り立てた。お尻の谷間にペニスを滑らせ、射精に向けて一気にスパートをかける。咲希も弘樹の腿に手を突き、それに協力しようとする。だが、梨奈が慌ててそれをたしなめた。
「待って！　ここ観覧車だよっ！　出すなら外じゃなくて、咲希ちゃんの中にして！」
「ばばば、バカ、何言ってんのよ！」
親友の過激発言に咲希が焦るが、確かにこのまま出そうものなら、シートを汚して係員に大目玉を食らうのは必至。絶頂することしか考えられない下半身を、泣く泣く、必死に、魅惑的な尻肉から引き剥がす。
「うっく……がッ！」
だが、差し迫った射精感までは止められない。肩で喘いだ咲希が振り向いて、仰け反り呻く弘樹の腰に跨った。ゴンドラは下降に入っている。もう時間がない。彼女は梨奈にサポートされながら、濡れた恥襞の中へ一気に勃起を埋め込んだ。
「お、ぐ、あぁぁぁあぁぁぁッ！　さ、咲希ちゃんのが……絡み、つくっ！」
熱いぬめりに包まれて、弘樹はついに絶叫した。だが、キスを求めてきたのは金髪の美

少年。同性に挿れているような倒錯感が理性を麻痺させ、彼女のお尻が浮くほど激しく腰を突き上げた。
「ふきゅぅみゅあぁぁっ！　つ、強い……わたしのあそこ……壊れちゃうッ！」
もがくように互いを掻き抱き、舌を絡める。それを、梨奈が眼を輝かせて凝視した。
「あはぁ……おにいちゃんと咲希ちゃん……男の子同士でキスしてるみたぁい……」
興奮し、舌舐めずりする梨奈。しかし金髪美少年は必死に首を振り、まるでその膣でペニスの形や大きさを確かめるように、卑猥に腰をうねらせた。
「あ……は……ッ。ぜ、全然、違……うっ！　だって、だって本物のおちんちんて……こんなに、あ、熱くて……逞しくて……す、凄っ……い、ひぃぃはあぁぁぁッ！」
咲希の身体がぶるっと震えた。迫り来る絶頂感に身を捩らせる。恥裂から蜜を飛ばし、膣襞とカリ首をずりゅずりゅと擦り合わせる。
「もっと……もっと突いて……！　わたしの中……メチャメチャに掻き回してっ！」
咲希の卑猥なセリフに梨奈も蕩けた笑みを浮かべ、自分の下着に手を突っ込んだ。
「はぁ、凄い……咲希ちゃんのおま○こが、おにいちゃんの飲み込んで……ふぁっ！」
梨奈の切なげな悲鳴が、セックスに耽る二人の耳を心地よくくすぐった。大観覧車の終点が近い。弘樹は咲希の腰を掴み、フィニッシュに向かって膣奥まで勃起を突き立てた。
「ふあぁぁッ！　刺さってる！　深いとこまで……ッ、きゅあ、ひぃぃあぁぁッ!!」
「咲希ちゃん、のも……っ、締まってる！　あがッ、あ……で、出そう……だ！」

だが、おっぱい発言にも動じることなく、梨奈は真っ直ぐにエリカを見据えた。
「……確かにあたしは、エリカさんの言う通りの半端者かもしれません。だから……いただいたお仕事を、精一杯に頑張るだけです」
静かな主張に、エリカは言葉を失った。怒りに全身をぶるぶる震わせる。梨奈の手から台本をひったくると、何も言わずにスタジオを去っていった。
(何て人だ……)
エリカは咲希をさらに追い詰めるため、その親友の評判まで落としにきた。
梨奈の態度は、そんな彼女への宣戦布告のようなもの。所属が違うとはいえ、業界の大先輩を怒らせた妹の大胆さは、弘樹に大きな不安を刻み込む。
そしてその梨奈も、エリカが見えなくなると同時に、弾かれるように走り出した。
「お……おい梨奈っ⁉」
彼女は戸惑う兄を置いて、階段を駆け上がり、自分の楽屋に飛び込んだ。弘樹も続けて入ろうとして、しかしドアノブに掛けた手を慌てて引き剥がす。スタジオ同様、楽屋も事務所単位なのを忘れていた。梨奈の個室というならともかく、ブラン・プロからはあと二人の出演者がいたので、男の弘樹がノックもせずに乱入したら大騒ぎだ。
「か、香澄梨奈さーん。いらっしゃいますか〜？」
返事がない。それでも、二、三度ノックを繰り返したら、恐る恐る、ゆっくりとドアが開いた。十センチほどの隙間から、梨奈が顔を覗かせる。

「………おにいちゃん？」
「まったく。急に走り出すなよ。入っても大丈夫……わぁ⁉」
今度は向こうから弘樹を引っ張り込んだ。無言で抱きついてくる水着少女を、派手な音を立てて閉まったドアに寄り掛かるようにして受け止める。
「うわ～ん！　こ、怖かった～！」
やはり、虚勢を張っていただけだった。スタジオでの毅然とした態度が嘘のように、むしろあっちが嘘のようだが、ひっくひっくと幼女のように泣きじゃくる。
「お前……泣くくらいなら、何だってあんな格好つけたりしたんだよ」
「だって……だって……咲希ちゃんの気持ちも知らないでって思ったら……」
許せなくて、憤りのあまり、自分でも思いもよらない行動に出てしまったらしい。
「だからそれは、咲希ちゃんが自分で何とかするって話になったろ」
「でも……でもぉ……」
ぽろぽろと大粒の涙を零す。親友を思ってなのは分かるが、後先考えず、勝算もなしに大手事務所の先輩に噛みついたのはまずかった。
「エリカさん怒らせちゃった……。どうしよう……。あたし、干されちゃうのかな……」
「いや、いくら何でも……」
そこまでの影響力が、エリカにあるとは思えない。そう言いかけて、弘樹の中にも不安がよぎった。彼女はドラマのプロデューサーと親密な関係にある。ドラマ関係者から悪い

噂を広めるのは難しくない。
弘樹が黙り込んでしまったせいだろう。兄を見上げる梨奈の顔が、見る見る蒼褪めていった。ガクガクと唇を震わせ、膝が折れるようにへたり込む。
（しまった――！）
彼女を励ますどころか、逆に不安を煽ってしまった。自分の無謀な行為に苛まれ、泣き出しそうになる梨奈。しかし、エリカの提案に乗って抗議に行っても、きっと結果は同じだったろう。芝居では素人のくせに生意気なという話に持っていかれたはず。
「大丈夫。お前が真面目にやってるのは、一緒に仕事をした人ならみんな知ってるんだから。干されるなんてありえないよ。だからもう泣くな」
梨奈の選択は間違っていない。弘樹は自分にもそう言い聞かせ、力なく座る妹を立たせようとした。水着で震えているせいで、見た目にも寒々しい。しかし不安に駆られた彼女の身体は強張り、彫像のように動こうとしない。
「おい梨奈、もう行かなくちゃ……梨奈？　お、おいっ⁉」
困り果てていた弘樹の股間に、虫が這い回るようなむず痒さが走った。腰に抱きついた梨奈が、ズボンの上から肉茎を撫で回していたのだ。まるで何者かに操られているような虚ろな眼でベルトを緩め、中からペニスを取り出してしまう。
「お前っ……こんなところで……！」
ここは多くの人が行き交うテレビ局だ。誰かに見つかったらただでは済まない。だが梨

奈は、焦る弘樹の呼び掛けにも応じようとせず、それどころか、まだ柔らかい兄の性器をためらいもなく口に含んだ。

「はう！」

温かい唾液をまとった舌が、先端をひと舐め。甘美な疼きが流れ、小さな肉塊はたちまちむくむくと鎌首をもたげた。一瞬にして、張り詰めた勃起へと膨れ上がる。

「んむっ……あむ……ン！」

しかし、いつもなら兄の反応に嬉しそうな眼をするのに、今日の彼女は無表情で勃起を貪った。首を振って、まるで自分を犯すように、汚すように、無我夢中で口腔の隅々にペニスを擦りつける。

「梨奈……どうしたんだよ」

こんな一方的な愛撫では気分が乗らない。彼女の必死の愛撫にもかかわらず、勃起が硬度を失いかける。焦った梨奈が、ペロペロと鈴口やカリ首を舐めてくる。

（……前にもこんな風に楽屋でしたことがあったっけ……）

あの時も、スキャンダルで引退の危機に追い詰められていた。梨奈は焦燥感に駆られると、時と場所を選ばす性欲が暴走する癖がある。

（なら、それは俺が解消させてやらなきゃ）

まったく顔に出さないが、芸能界なんて大変な世界で、彼女はいつも不安でいっぱいのはず。この程度のワガママで、うろたえてなんかいられない。

「あ、でも……この楽屋、他の娘も使ってたはず……」
場所を変えた方がいいだろうか。すると、勃起を咥えながら上目遣いで梨奈が答えた。
「あ、あの娘たちなら……んむ、もう帰ったよ……」
そう言われれば荷物がない。なら、しばらくは大丈夫だろう。安心した途端に、ペニスが彼女の舌の動きを鋭く感じ出した。必死になって愛撫する妹が愛おしくなり、ムクムクと、急速に硬度を取り戻す。
「はぁ……あはぁ……おにいちゃん……っ」
兄の復活に梨奈は唇を綻ばせて喜び、改めて肉茎に食いついた。ちゅぱちゅぱと音を立てて亀頭に吸いつき、唾液いっぱいの口腔に根元まで飲み込んでいく。
「ああ……いいよ梨奈……。好きなだけ……うッ!」
肉竿に巻きついた舌に付け根を撫でられ、弘樹は呻きを必死に飲み込んだ。楽屋は二人きりでも、ドアの向こうには人の気配が絶えない。だが、ばれたらという危機感がスリルに似た快感を呼び、腰の奥をグツグツと発熱させる。
身体をくねらせ堪えている兄に、梨奈にも余裕が戻ってきたらしい。唇の端を嬉しそうに上げ、首を左右にくねらせながらジュポジュポ扱く。弱点を知り尽くした愛撫は、たちまち弘樹を追い詰める。
だが、込み上げてくる絶頂感を解放しようか、それともまだ我慢しようかと迷い始めた肉棒を、梨奈はいきなり吐き出してしまった。

「あ……！」
反射的に不満の声を漏らす。しかし、彼女は呆けた瞳で弘樹を見上げ、唾液で濡れたそれを、胸の間に迎え入れた。乳房を両手で挟み込み、覆い被さるようにして水着からはみ出た下乳から挿入していく。そして、柔らかな胸の谷間に肉竿を滑り込ませる。
「うぉ……ンあ！」
弘樹も彼女の肩に手を置き、ズンと腰を突き入れた。堪らず声が漏れる。水着で包まれた胸の谷間の窮屈さに。サイズに見合わない布切れに押し込まれた、乳肉の圧迫感に。まるで膣に挿れているような快感が下半身を襲い、自然に抽送を始めてしまう。
「ふぁあ！　お、おにいちゃんの、おちんちんが……おっぱいグチュグチュしてるぅ！」
梨奈も胸を揉み出した。ピストン運動に不規則な圧迫が加わって、一度萎えかけたとは思えない速さで射精感が込み上げる。
「くふぅっ……あッ、梨奈の胸、気持ちよくて……もう出ちゃいそうだ……！」
「あふ、あ……。……い、いいよ、出しちゃって……。おにいちゃんので、あたしの胸いっぱい汚して……ベタベタにして！」
乳房に埋もれたカリ首が、滑らかな肌に擦られる。快感が下半身を覆って、震える膝を支えきれない。妹の露わな肩に指を食い込ませ、腰を振る速度を上げていく。
「擦れ……っ、胸……ああっ、おちんちん膨らんで……ふあぁぁっ！」
「梨奈……梨奈ぁっ！」

胸の奥に突っ込んだ途端、弾けるような脈動と共に、熱い迸りがペニスを駆け抜けた。水着に締めつけられほとんど隙間のない乳房の間に、粘着精液が吐き出される。
「はぁぁぁっ！　熱ッ……むっふぅぅウッ‼」
辛うじて、理性が悲鳴を抑えつけた。梨奈は手の甲で口を塞ぎ、兄が出したものを胸で攪拌する。行き場を失った精液はクチュクチュと粘着液を立て、乳房の丸みに沿って零れ落ちる。
「はぁ……はぁ……。おっぱい、おにいちゃんのでドロドロぉ……」
潤んだ瞳で、嬉しそうに自分の胸を見下ろす梨奈。しかし欲情は治まるどころか、ますます彼女の身体を火照らせていた。精液まみれの勃起を胸からずるっと抜いて、物欲しそうに弘樹を見上げる。
「はぁ、はぁ……。り、梨奈……まだ、欲しいか？」
梨奈は微笑み、涎が一筋、唇から糸を引いた。兄のペニスや精液の臭いにすっかり酔っている。しかしそれは弘樹も同じ。裸同然の妹の汗の匂いに、カケラほどしか残らない自制心すら破壊されそうになる。
「欲しいなら、ちゃんと言わなくちゃ。ほら梨奈、目一杯いやらしい格好で、エッチなおねだり、してごらん？」
するとと梨奈はのろのろと立ち上がり、楽屋の中央に置いてあったスチール机に上半身を突っ伏した。反対に、お尻は肩幅に開いた脚で突き上げる。気だるそうな眼が弘樹を振り

返り、自らの手で、水着の底を大きくずらした。
「はぁ……はぁ……。お、おにいちゃん……。梨奈の、ここに……挿れてくださぁい。おちんちん、おま◯こに挿れて、いっぱいいっぱい、じゅぽじゅぽしてぇっ！」
舌足らずな声で、切なげに肉欲を叫ぶ。机に唾液の水溜りを作り、こんなにいやらしい格好で卑猥な言葉を叫んでいるのに、なお、彼女は清楚なままだった。しかし、その不思議なまでの清らかさがペニスをいきり立たせる。汚してしまいたい邪な欲求が渦巻く。
「ああ……いい匂いだよ……」
だがまずは、甘い匂いの蜜を味見。開いた脚の間に屈んで、露で宝石のように輝く恥裂を舐め上げる。
「ふぅぅきゅッ！　ふぅぅあぁぁぁぁあッ！」
「そんなに大声を出したら、外に聞こえちゃうぞ？　そしたらドア開けられて、梨奈のここが丸見えだ」
弘樹の脅しに身を硬くして、必死に口を塞ぐ。それでも、舌で恥襞の間を探るように掻き分けるたび、細い悲鳴が短く漏れ出る。
「おにっ……おにいちゃ……ン！　はぅ……あたし、もう……もう……！」
舌だけでは、もう我慢できないのだろう。涙目で振り返る妹が、挿入を求めてお尻を振った。弘樹の下半身でも、お預けを食った勃起が出番を要求するようにビクビク跳ねる。
「俺もだよ、梨奈……」

挿入したいのは弘樹も同じ。ベルトを緩めるのももどかしく、小振りなお尻を鷲掴みにした。愛液と唾液で、爛れたように真っ赤な淫唇。そこへ、いきり立った肉欲棒を一気に奥まで突き立てる。

——じゅぶ、ずぶずぶずぶぅ！

「ふっ、ふきゅッ！　ふぁっ、くぅぅぅあぁぁぁッ！」

声を出すまいと、梨奈が死に物狂いで髪を振り乱す。そんな必死な妹の姿と、彼女の胎内の温かさに、弘樹の理性の方が一瞬吹き飛んだ。吸いつく陰唇を押し退け、少女の背中に伸し掛かって膣内へ分身を押し込んでいく。複雑な膣襞を引っ掻き回す。

「しゅ、しゅごぉぉいっ！　そこ……そこ、ぐじゅぐじゅって……もっと、もっとぉ！」

妹のはしたないお願いが、さらに抽送を加速させた。締めつけてくる膣口を掻き回すように、回転を加えた腰使いで勃起を捻じり込む。

「う……ぐッ！　こ……ここ、擦られるの好きだろ？」

「ひッ……ンんッ……好き、そこしゅきッ！」

膣内のザラザラした部分を擦ると、梨奈が弓なりに仰け反った。ついには水着の伸縮の限界を超え、バレーボールのような白い双球がぽろんと零れる。ずっしり手に重い乳房を掬い上げるように支え、コロコロと乳首を転がす。

「んひゅッ、きゅ、きゅはっ！　お、おっぱい……ンンッ、みゅうぅぅぅぅぅッ！」

さらに彼女に覆い被さり、火照った背中にキスを這わせた。肩甲骨のラインに沿って舌

を往復させると、彼女が両の拳を握って頭を振る。
「らめ……らめぇ！　声、出ちゃう……ンンンッ！」
肉欲に狂いながらも、唇を噛んで悲鳴を抑える梨奈。だが今度は弘樹の方が彼女の肌の匂いの虜になって、小刻みに腰を振りながら首筋をねっとりと舐め上げた。
「――――ッ!!」
スチール机に爪を立て、梨奈が声にならない声で叫んだ。肉茎を咥え込んだ淫裂から蜜がどっと溢れ出し、お漏らしをしたように彼女の太腿をしとどに濡らす。締めつけも強くなって、激しく勃起を疼かせた。
「梨奈っ……梨奈っ！」
弘樹の下半身にも限界が差し迫る。重ねていた上体を起こし、バックから思いきり妹を突きまくる。
「キュッ……はぁん！　あんっっっくぅふはぁぁぁぁぁッ!!」
胎内をドリルのように抉る勃起に合わせ、梨奈のお尻も前後に動きながら円を描く。弘樹が犯しているというより、ひと突きごとに彼女に飲み込まれていくかのようだ。
「ふぅぅぅ……はぁぁぁ……っ！　あたしイクっ。イッちゃいそう……！」
弘樹も限界までピストンの速度を上げた。濡れた陰唇が裏返り、ピンクの粘膜が勃起に貼りつく。膣内の襞が、離すまいと肉棒に絡みつく。淫裂の疼きが伝染したように、弘樹の股間も再びの絶頂感が襲いくる。

「も……もう、俺も……俺も、もう！」
　パンパンに張った勃起を思いきり突き入れた。膣肉が収縮する。狭くなった肉トンネルを逆撫でしたカリ首との淫摩擦が兄妹の頭を真っ白に染め上げる。
「イッ⁉　ひィィィあぁぁぁ！　そ、そんなのダメッ、らめぇぇぇぇぇッ‼」
　グッと背中を反らせて梨奈が叫ぶ。同時にペニスも限界を超え、妹の中に溢れんばかりの白濁粘液を吐き出した。
　――びゅる、ドクドク、ドクンッ、じゅぶるるるるぅぅぅぅっ！
「ひふぁ！　おぉぉぉぉお腹、出てる！　おにいちゃんの、中に、ふぁきゅあぁぁぁあッ！」
　膣内に熱い精を受け、小柄な身体がビクビク震えた。声を抑えていた分、全身が波打つように激しく痙攣する。やがて硬直が解けると、脱力した梨奈の膝から力が抜けて、テーブルに立てかけてあったパイプ椅子を派手に倒しながら床に崩れ落ちた。

　咲希を励まそうと、梨奈を慰めようと、そんなものは一時しのぎ。そんな無力感を痛感させるように、ワイドショーや週刊誌は、連日のようにポールスター・プロ内の対立や咲希の移籍を騒ぎ立てた。
「この前の番組でも一緒だったんだし……何か言えばよかったんじゃないか？」
「何かって、何をよ。それが分からないから悩んでるんじゃない」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん
—Takeuti Ken presents harem series official guide—
ハーレムシリーズ
公式ガイドブック
竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!
特別描き下ろし
イラストも多数収録!
Now On Sale!!
A5判／定価990円(税込)
KTC
特設サイトはこちらからアクセス!!
http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ
あなたはどのタイプ？
ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！
二次元
ドリーム文庫
サイズ：文庫
戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！
※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません。
サイズ:新書
二次元
ドリームノベルズ
日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！
サイズ:文庫
リアルドリーム文庫
フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！
サイズ：文庫
あとみっく文庫
詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!